

『今昔物語集』構想に対する一試論

— 三国構想における三韓関係説話の捉え方を中心に —

A NEW THEORY OF THE KONJAKU MONOGATARI PLAN

The Meaning of “Sankan”

李 瑛 雅*

The tale of the Three Countries of Korea is recorded in thirty-one episodes of the *Konjaku Monogatari*.

One feature of *Konjaku Monogatari* is the concept of the “three nations”: India, China, and Japan. This idea views Buddhism as created in India, propagated in China, and ultimately flourishing in Japan.

The *sankan* (Three Countries of Korea) is absent from this concept of *sangoku* (Three Nations). This has been interpreted as signifying that the compilers of *Konjaku Monogatari* did not recognize the concept of *sankan*.

However, a description of the *sankan* taken from *Nihon shoki* is recorded in the first story of Part Eleven of *Konjaku*, and it is my view that its appearance here is of considerable importance.

The compilers of the *Konjaku* did indeed remove the idea of *sankan* from their concept of the three nations. However, I believe it can be argued that rather than discarding the *sankan* altogether, their intention was rather to

*LEE Young-Ah 徳成女子大学卒業。韓国外国語大学大学院修士課程修了。現在、神戸大学文化科学研究科在籍。修士論文「『今昔物語集』巻15に関する一考察－『日本往生極楽記』との比較を通して」。「今昔物語集と弘法法華伝と法華靈驗伝」との比較論文を執筆中。

incorporate it.

I はじめに

筆者が本稿のテーマ『今昔物語集』の三国構想における三韓関係説話の捉え方に興味を持った切っ掛けは『今昔』収録の三韓関係説話とそれがもとにした依拠資料とを調べてみてからである。ここで言う三韓とは古代朝鮮半島に存在した三国、即ち高句麗、新羅、百済を指す。通常は三韓よりも三国という呼び方が一般的であるが、本稿では『今昔』での「三国」天竺・震旦・日本との混用を避けるために三韓と呼ぶことにする。

資料 1) 『今昔物語集』の依拠資料における三韓説話

	合計話数	三韓説話	今昔引用話数
三宝感応要略録	164	2	2
日本霊異記	116	14	14

さてその調査の結果が(資料 1)であるが、それを見ると『今昔』は自分の入手できる範囲内の三韓関係説話はすべて収録していることが分かる。これは今までの『今昔』研究では明らかにされなかったある重要なことを示していると思う。従来の研究では三韓関係説話に対する『今昔』の否定的な態度だけにその焦点が当てられてきた。しかしながら、(資料 1)が見せてくれるのは『今昔』の三韓関係説話に対する積極的な受容の態度であると思われる。この面白い事実を目の当たりにして筆者は三韓関係説話に対する『今昔』の受容の仕方について改めて考えてみたいと思う。これが本発表のテーマに取り掛かるようになった切っ掛けである。

『今昔』は全体三十一巻(その中で巻八、巻十八、巻二十一は欠巻)の中に1,040余話という膨大な量の説話が一定の整然とした組織原理によって構築された作品である。(資料 2)^①の左端をみても分かるようにその作品の世界観

資料 2) 『今昔物語集』組織表

篇	部	卷	標 題	説 話
天 竺	仏法	一	天竺	釈迦誕生、成道、教化
		二	天竺	釈迦教化
三		天竺	釈迦教化、涅槃	
四		天竺付仏後	釈迦涅槃後の仏法史	
	世俗	五	天竺付仏前	王朝史、他
震 旦	仏法	六	震旦付仏法	仏法伝来、仏・経靈験
		七	震旦付仏法	経靈験
(八)			欠(菩薩靈験か)	
		九	震旦付孝養	孝養、因果応報、他
	世俗	一〇	震旦付国史	王朝史、他
本	仏法	一一	本朝付仏法	仏法伝来、諸寺縁起
		一二	本朝付仏法	塔婆縁起、法会由来、諸仏靈験、経靈験
		一三	本朝付仏法	経靈験(法華)
		一四	本朝付仏法	諸経靈験(法華、般若、方広、他)
		一五	本朝付仏法	往生
		一六	本朝付仏法	菩薩靈験(観音)
		一七	本朝付仏法	菩薩靈験(地藏、他)、諸天靈験
		(一八)		欠
		一九	本朝付仏法	出家、孝養、三宝加護、他
		二〇	本朝付仏法	天狗、冥界、因果応報、他
朝	世俗	(二一)		欠(王朝史か)
		二二	本朝	藤氏列伝
		二三	本朝	諸道(武力、剛力等)
		二四	本朝付世俗	諸道(医、陰陽、音楽、詩歌、他)
		二五	本朝付世俗	兵列伝
		二六	本朝付宿報	宿報
		二七	本朝付靈鬼	靈鬼
		二八	本朝付世俗	滑稽
		二九	本朝付悪行	悪行、動物
		三〇	本朝付雑事	恋愛
		三一	本朝付雑事	雑

は天竺、震旦、本朝という三国構想を採っている。それは、仏法の側から全世界を把握しようとした『今昔』撰者の世界観の表われでもある。さらに『今昔』は日本ではじめて三国世界を自己の作品世界に構築した作品でもある。

しかし、古代朝鮮即ち三韓からの仏法初伝を伝える『日本書紀』欽明天皇十三年十月条の「百濟聖明王、遣西部姫氏達率怒 斯致契等、献釈迦仏金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干卷」^②という記事からも知られるように古代日本の仏法伝来史上、三韓の存在はとても重要だと思う。しかしながら『今昔』の三国構想から三韓は欠落している。それに対して従来の研究では日本を中心に仏教的世界を作り上げようとする自国意識の鼓舞に伴われる必然的な結果として三韓関係説話に対する『今昔』の否定的な捉え方が生まれたとされてきた。確かに自国意識は『今昔』の資料である『日本霊異記』や『三宝絵詞』などにも見られるものでこれらの先行書から見られる極端な自国意識が『今昔』における三韓のない三国構想を生み出したとも考えられる。

本稿の目的は三国構想のもとに作品世界を構築した『今昔』撰者が三韓関係説話をどのように捉えたかを考察することにある。そしてこの考察によって『今昔』撰者が三韓説話に対して捨象というよりは受容の態度を採っていることを明らかにしたいと思う。しかし本稿の考察はあくまでも『今昔』の作品世界を構成している方法論的原理を理解するための一手段にすぎないことをことわっておきたいと思う。

Ⅱ

『今昔』には三韓関係説話が都合32話収録されている。(資料 3)は三韓関係説話の一覧表である。従来の研究では30話と数えられていたが、しかし筆者の本文検証に依ると卷十一の第23話と卷三十一の12話の二話も加えるべきだと思われる。両話の中で先ず一方は現光寺の霊木による仏像造立譚でここで三韓関連記述は「隣国ノ客神」とあり、また一方は題から見られる「度羅島」とは昔「耽羅島」といって、いまの韓国の南西部にある済州島のことである。従

資料 3) 三韓関係説話の一覧表

	卷	標 題	出 典
震旦	六 六 十	沙彌念胎藏界遁難語第三十 新羅僧兪受持阿含語第三十六 莊子請 <input type="checkbox"/> 粟語第十一	三宝感応要略録 三宝感応要略録 莊子
本朝	十一 十一 十一 十一 十一 十一 十一 十二 十二 十二 十二 十四 十四 十四 十六 十六 十六 十七 十七 十九 十九 二二 二四 二四 二九 三一 三一 三一 三一	聖徳太子於此朝始弘佛法語第一 道照和尚亘唐伝法相語第四 玄昉僧正亘唐伝法相語第六 聖武天皇始造元興寺語第十五語 代々天皇造大安寺所々語第十六 推古天皇造本元興寺語第二二 建現光寺安置靈仏語第二三 於山階寺行維摩会語第三 比叡山行舍利会語第九 於石清水行放生会語第十 於法成寺繪像大日供養語第二二 山城国高麗寺栄常謗法花得現報語第二八 百濟僧義覚誦心經施靈驗語第三二 依調伏法驗利仁將軍死語第四五 僧行善依觀音助從震旦婦来語第一 伊予国越智直依觀音助從震旦返来語第二 新羅后蒙国王咎得長谷觀音助語第十九 備中国僧阿清依地藏助得活語第十八 比叡山僧依虚空蔵助得智語第三十三 龜報百濟弘濟恩語第三十 髑髏報高麗僧道登恩語第三十一 高藤内大臣語第七 百濟川成飛彈工挑語第五 延喜御屏風伊勢御息所説和歌語第三十一 鎮西人渡新羅值虎語第三十一 鳥羽郷聖人等造大橋供養語第二 鎮西人至度羅島語第十二 能登国鬼寝屋島語第二十一 尾張守 <input type="checkbox"/> 於鳥部野出人語第三十	三宝絵詞 三宝絵詞 未詳 未詳 三宝絵詞 未詳 日本靈異記 三宝絵詞 三宝絵詞 未詳 未詳 日本靈異記 日本靈異記 未詳 日本靈異記 日本靈異記 未詳 未詳 未詳 日本靈異記 日本靈異記 未詳 未詳 未詳 未詳 未詳 未詳 未詳 未詳

って、三韓関係説話の合計話数は従来の30話から32話に修正される。

それを細分してみれば震旦部に3話、本朝仏法部に22話、本朝世俗部に7話が収録されている。ここで注意を要するのは三韓関係説話の分布状況である。三韓関係説話は震旦部にも本朝部にも収められている。これは『今昔』が、資料である『三宝感応要略録』や『日本靈異記』、『三宝絵詞』をどのように利用したかという問題ともかかわってくるが、つまり三韓説話が震旦、本朝の両部に跨っているという事実が示唆しているのは『今昔』撰者が三韓の説話の処理にいかにか苦渋したかという事実でもある。『今昔』をそれがもとにした資料と比較してみると『今昔』は大部分に於いては資料をそのまま翻訳していることが分かる。とはいえ組織原理に背反する時は改変という方法を以って組織原理を優先させることも分かっている。しかし(資料 3)からはそのような『今昔』の強固なまでの組織原理がここでは崩れていることが分かる。即ち、三韓関係説話は新羅あるいは百済等の国名を題目に掲げているにもかかわらず震旦部や本朝部の両部に跨っているのである。これは『今昔』の組織原理に背反することで三国構想における三韓関係説話の処理に難渋する『今昔』の一断面を端的に示していると思う。それではひきつづいて三韓関係説話が三国構想の中でどのように取り上げられていくかを具体的に見てみたい。その前に『今昔』の三国構想を支えている三国意識の特徴をほかの作品と比べてその位相づけを明らかにしておこうと思う。

Ⅲ

資料 4) 三国意識の歴史的展開

a) 『内證仏法相承血脈譜』

叙曰。譜図之興其来久矣。夫仏法之源出於中天。過於大唐流於日本。天竺付法已有経伝。震旦相承亦造血脈。我叡山伝法未有師師譜。

謹纂三国之相承以示一家之後葉云爾。（「伝教大師全集」第一卷所収）

b) 『教時諍』

夫我大日本国有九宗教。人法諍論有三国。夫言三国者。一天竺国。二震旦。三日本。—中 略—三国諸宗興廢有時。九宗併行。唯我天朝。

（「大正蔵」卷七十五所収）

c) 『日本国現報善悪靈異記』上巻 序

原ねみれば、夫れ内経外書の、日本に伝はりて興り始めし代、凡そ二時有り。皆百済の国より將ち来る。輕嶋の豊明の宮に宇御めたまひし誉田の天皇のみ代に外書来り、磯城嶋の金刺の宮に宇御めたまひし欽明天皇のみ代に内典来る。—中 略—昔漢地に冥報記を造り、大唐国に般若験記を作りき。何ぞ、唯他国の伝録に慎しみて、自土の奇事を信け恐り弗らむや。□に起ちて自ら□るに、忍び寝むこと得不。居て心に思ふに、黙然ること能は不るが故に、聊か側に聞くことを注し、号けて日本国現報善悪靈異記と曰ひ、上中下の三卷を作して季の葉に流ふ。

（「岩波古典文学大系」）

d) 『三宝絵詞』 中巻 序

—前 略—抑天竺ハ仏乃アラハレテ説給シ境震旦ハ法ノ伝テヒロマレル国也コノ二所ヲ聞ニ仏ノ法漸アハテニタルヘシ—中 略—アナタウト仏法東ニナガレテサカリニ我国ニト、マリアトヲタレタル聖昔オホクアラハレ道ヲヒロメ給君今ニアヒツキ給ヘリ

（「三宝絵集成」）

資料 4) の a) から d) を通じて見れば先ず平安初期には既に「三国」という世界観が成立されているのが分かる。なおまた『今昔』以前の三国意識は仏法伝来史を自国中心に構成していくための基になるものとしてあることも分

かる。例えばc) 日本靈異記を資料として利用したd) の三宝絵の場合はc) に比べて三国という世界観のなかに日本を位置づけて、なお仏法は日本に至ってこそ隆盛しているという誇りを語っている。その記述態度からはc) よりも更に強調された自国意識が見られる。このような自国意識は平安時代よく見られたものであるがこれとは違う注目すべき作品があるが、資料 5) を見てみたい。

資料 5) 『善光寺縁起』第一 当卷明天竺百濟利益

抑善光寺生身如来者。昔依東天竺毘舍離城月蓋長者召請来現此土本尊也。

尋其出世利物生起由来者。即可有三国伝来三意。三国者。天竺百濟日本也。

(「続群書類従本」卷八百十四所収)

資料 5) は善光寺の弥陀如来の仏像が生身如来でなおそれが仏教伝来初伝のものである意義を伝来時期が欽明天皇十三年ということで説明している。それによって当寺の来歴の深さを語っている縁起譚である。さてこの資料で注目を要するのは三国の概念が(資料 4) の資料群とは遥かに違うということなのである。傍線の部分の「三国者。天竺百濟日本也。」から明らかなように三国とは天竺・震旦・日本の三国構成ではなく、天竺・百濟・日本の三国構成を採っているのである。ここでは震旦の代わりに百濟が入っているのが特記すべき事実である。

それでは次は『今昔』について見ていこうと思う。

資料 6) 『今昔物語集』の三国意識

a) 其後、我ノ門徒ヲ立テ、顕密ノ法ヲ弘メ置ク。其流レ、仏法繁盛ニシテ
干今盛リ也。但シ、慈覚ノ門徒ト異ニシテ常ニ諍フ事有リ。其レ、天竺・

震旦ニモ皆然ル事也トナム語り伝ヘタルトヤ

(卷十一智証大師亘宋伝顕密法帰来語第十二)

- b) 但シ、彼ノ弥勒ハ干今御マス。化人ノ造奉ル仏ニ御マセバ糸貴シ。亦、天竺、震旦、本朝、三国ニ渡給ヘル仏也。正ク度々光ヲ放テ、帰敬スル人皆兜率天ニ生タリ。世ノ人尤モ礼可奉ト。

奈良ノ元興寺ト云フ、是也トナム語り伝ヘタルトヤ。

(卷十一聖武天皇始造元興寺語第十五)

- c) 亀ノ人ノ恩ヲ報ズル事今ニ不始ズ、天竺震旦ヨリ始メテ此ノ朝マデ此ナム有ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。

(卷十九亀報百濟弘濟恩語第三十)

資料 6) は『今昔物語集』の三国意識を本文から捉えてみたものである。

a) は智証大師の門徒と慈覚大師の門徒との争いを天竺や震旦に例えながらこんなに醜い争いが事実上にあったことは否めないけれどもそれは絶対に日本の仏法が廢れているからではない、それは仏法の伝来国である天竺や震旦にもあることだということで自国における仏法の興隆を語っている。

b) は元興寺の弥勒仏の造像と三国伝来をめぐって元興寺の興廢を語っている。ここでは天竺・震旦・本朝を「三国」という言葉で概念化させていることが注目される。

c) は百濟からの渡来僧弘濟が逃がしてやった亀がその恩に報いるという話である。『今昔』は亀の報恩話は天竺・震旦にもあってまた本朝にもある、と語りだして自国で起こった吉事が一時の現象的なことではなく仏法の伝わった三国の内だからこそ有り得ることだとの意識を以てこの話を天竺・震旦・本朝という三国構想の内に入れようとしているのである。

以上の考察の結果を整理してみると、『今昔』の三国意識は自国意識と表裏

の関係にあることが先ず確かめられたと思う。但しそれは『三宝絵詞』のような天竺・震旦さえも乗り越えようとする過剰な自国意識との関係に置かれたのではない。『今昔』における三国意識と自国意識は両者が相互に包摂、受容する関係である。この態度は三韓関係説話を受容するときにも一貫していると思う。

さて『今昔』から天竺・震旦・本朝という三国意識が明確に記されている用例は僅かな数に過ぎないが、中でも『今昔』全巻を通して一度しか出てこない「三国」という概念化^③された言葉で捉えられているb)の話は三韓関係説話である。これにもう一度注目してひきつづきこの問題を考えていきたいと思う。

資料 7) 『今昔物語集』と『善光寺縁起』の比較表

項目事項	『今昔』元興寺縁起	『善光寺縁起』
①発願者	長元王	月蓋長者
②発願者の国名	東天竺国ニ生天子国ト云フ国	東天竺国
③仏像名	弥勒	彌陀如来(生身如来)
④伝来国名	天竺-白木ノ国(新羅)-本朝	天竺-百済国-本朝
⑤駐韓年数	数百歳ニ及テ	一千十二回星霜
⑥日本伝来時期	元明天皇	欽明天皇治天下十三年
⑦関連叙述部分	資料 b)	資料 5)

資料 7) は資料 6) の b、『今昔』の元興寺縁起と資料 5) の善光寺縁起とを比較した表である。両縁起譚共に仏像の三国伝来をもって仏法伝来上の当寺の由緒を語ろうとする発想に変わりはない。さてこの比較表から見ればおそらく当時日本では三韓経由の伝来が自己の由来の深さを裏付けてくれるという認識があったと思われる。特に善光寺縁起ではその傾向が顕著である。先ず表の番号④に注目したい。これから見ると二つの縁起譚は共に一方は天竺・百済・本朝という伝来ルートで、もう一方は天竺・新羅・本朝というルートをもっている。すなわち両説話共に三国伝来の意義をもって当寺の来歴を語っているが、しかし『今昔』は評語の部分で新羅を震旦に言い換えていることが分

かる。このような『今昔』の改変の行為は一体何を意味しているのか。比較の結果からすると『今昔』は実際のな仏像伝来過程においては三韓の存在を認めながらも歴史的に仏法を語ろうとするときには自分自身が強固に構築した三国観に固執していることが知られると思う。要するに歴史的に伝承・固定化された三国観と実質的な三国観との錯綜が『今昔』から見られると思う。そして元興寺縁起譚における撰者の改変行為による説話と評語の不一致による矛盾はその錯綜を典型的に象徴していると思う。このような説話の本筋と三国構想がずれる場合の断層から『今昔』が三韓関係説話をどのように位置づけているか知られると思う。資料 8) はそれをもっと象徴的に語っていると思う。

Ⅳ

資料 8) 『今昔』「卷十一道照和尚亘唐伝法相還来語第四」

亦、道照、震旦ニ在マス間、新羅国ノ五百ノ道士ノ請ヲ得テ、彼ノ国ニ至テ、山の上ニシテ、法華経を講ズル庭ニ、隔ノ内ニ我が国ノ人ノ語ニシテ物ヲ与フ音有リ。道照、高座ノ上ニシテ、法ヲ暫ク説キ止テ、此ヲ「誰ソ」ト問フ。其音答テ云ク、「我レハ日本ノ朝ニ有シ役ノ優婆塞也。日本ハ神ノ心モ物狂ハシク、人ノ心モ悪カリシカバ、去ニシ也。然レドモ、于今、時々ハ通フ也」ト。道照、「我が国ニ有ケル人也」と聞テ、「必ズ、面リ、見ム」ト思テ、高座ヨリ下テ尋スルニ、无シ。口惜キ事無限シテ震旦ニ返リニケリ。

資料 8) は道照の入唐求法に伴う諸伝承と帰朝後の靈異譚を中心的に伝えている話である。その中で『今昔』は役行者の言葉として「日本ハ神ノ心モ物狂ハシク、人ノ心モ悪カリシカバ、去ニシ也」と記しながら日本（自国）を相対化している。『今昔』はこの話を『日本靈異記』や『三宝絵詞』から引用している。しかしながら『日本靈異記』には二人の出会いの場面だけあって日本の悪口の叙述部分はない。問題の所在を明白にするために両書の本文と比較してみよう。先ず『日本靈異記』の本文から引用して見よう。「吾聖朝之人、道

照法師、奉勅求法往於太唐。法師受五百虎請、至於新羅、有其山中講法華經。干時虎衆之中有人。以倭語拳問也。法師問「誰」、役優婆塞。法師思之「我國聖人」、自高座下求之无之。」(吾が聖朝の人、道照法師、勅を奉りて、法を求めむとして太唐に往き。法師、五百の虎の請を受けて、新羅に至り、其の山中に有りて法華經を講じき。時に虎衆の中に人有り。倭語を以て問を挙げたり。法師、「誰ぞ」と問ふに、役の優婆塞なりき。法師、「我が国の聖人なり」と思ひて、高座より下りて求むるに無し。)と書いている。上述のごとくここでは二人の出会いの記述だけあって日本の悪口の記述は見られない。次は『三宝絵詞』を見てみよう。「我朝ノ道照法師勅ヲ承テ法ヲモトメムガタメニモロコシニワタリシ時新羅ニ五百虎ノ請ヲ受テ新羅ニイタレリ山内ニシテ法華經ヲ講スル庭ニ人アリテ我國ノ詞ニテウタカヒヲアケタリ道照和尚タレソト、ヘハ答云我ハモト日本国ニアリシ役優婆塞也彼国ノ人神ノ心モ枉リ人ノ心モアシカリシカハサリニシ也今モ時々ハカヨヒユクトイフ我国ノ聖也トシリテソノカヒニ高座ヨリヲリテヲカミモトムルニ忽ニミヘスナリヌ」と記している。問題の箇所を両書の本文と比較して見ると『今昔』は該当部分を『三宝絵詞』からそっくりそのまま引用していることが分かると思う。ところで『今昔』が抱えている問題を押さえてみるとつぎのようである。つまりこの話が収録されている『今昔』の巻十一は本朝の仏法伝来史を語る巻でそれを支えている根底の意識はとても強固な自国意識である。それなのにどうして『今昔』はここで自国の悪口を言わせている『三宝絵詞』の方を典拠として選んだのであるか。『今昔』はこの話の前の話で役行者を日本山岳修験道の創始者として取り上げている。(資料 8)の傍線の部分は『三宝絵詞』では話の末尾に語られている。『今昔』も典拠に充実する資料受容の態度からすると当然傍線の箇所は前話の末尾に位置させるはずである。しかし、『今昔』はその末尾の部分は未完にしておいたまま該当部分を次話つまり資料の傍線のところに移してしまったのである。『今昔』の資料受容の仕方としてこれはとても例外的な思いきった改変と見られる。それによって一番自国意識を顕示させるべき巻で自国を相対化させること

でその強固な構成原理に背く結果になるのである。『今昔』にとって考えてみればこのような都合の悪さを避けるためには『三宝絵詞』の代わりに『日本靈異記』の資料を選択したら何の不都合さもなく無難に済んだはずである。何故『今昔』はあえて自国の悪口を言っている資料を選んだのであろう。『今昔』の三国意識と自国意識について一連の研究業績を上げておられる前田雅之氏は傍線の部分に対して「今昔独自の排除と選択の原理」^④という表現をもって解説しているが、その「今昔独自の原理」が氏の論文では明らかにされていないようである。それについて少し私見を述べてみよう。要するにそれは『今昔』にも傍線の叙述に対してのある程度共鳴するところがあったのではあるまいか。だからこそ『今昔』はこの叙述を選択したのだと思う。『今昔』の成立推定年代の1130年代か1140年代ごろはその時代的雰囲気を見れば末法の認識が全社会を覆った時代である。その上時期的にそんなに遠くない1156年に「保元の乱」が起こっていることから推察できるように院政期の社会混乱も極めて激しい時代である。このような当時の末法的な現実状況が『今昔』撰者をして傍線の部分に同調する意識を持たせたのではないか。『今昔』ではこのような現実批判的な認識が散見するが、資料の傍線の記述はそのような選者の認識を象徴的に語っていると思われる。ここで自国を相対化する相対国の新羅国に対しては何の改変も加えない『今昔』の受容態度は新羅国という存在を抵抗なく受けているように思われる。道照の「我が国」と役優婆塞の「新羅と日本」の対応から見られる自国意識と自国を相対化する意識その相矛盾する意識の中に三韓説話は位置しているのである。

今まで『今昔』の三国意識は自国意識と不可分の関係だという前提からはじめてそのなかで三韓関係説話がどのように捉えられているかを考察してきたが、次は一番自国意識が尖鋭した説話における三韓関係記事を考察することでそろそろ本稿の結論に到達できると思う。

資料 9) 『今昔』「卷十一聖徳太子於此朝始弘佛法語第一」

a) 亦、太子、小野ノ妹子ト云フ人ヲ使トシテ、前身ニ大隋ノ衡山ト云ツ
□□ 妹子ニ教テ宣フ、「赤峯ノ南ニ衡山有リ。其ノ □□ 我ガ昔ノ同
法共有シ、皆死ニケム、今三人ゾ有ラム。其ニ会テ、我ガ使ト名乗テ、其
所ニ我住セシ時ニ持セシ法華經ノ合セテ一卷ナル御スラム、請テ可持来シ」
ト。妹子、教ノ如ク、彼ノ国ニ行テ、其所ニ至ル。門ニ一人沙彌有リ、妹
子ヲ見、其ノ言ヲ聞テ返入テ、「思禪法師ノ御使、此ニ来レリ」ト告レバ、
老タル三人ノ、杖ヲ植テ出来テ、喜テ、妹子ニ教經ヲ取セツ。妹子、經ヲ
得テ、持来テ太子ニ奉ル。

b) 或時ニ、七日七夜不出給。戸ヲ閉テ、音ヲモ不聞ズ。諸ノ人、此ヲ怪ム。
其時ニ、高麗ノ惠慈法師ト云フ人ノ云ク、「太子ハ是レ、三昧ノ定ニ入り
給ヘル也。驚カシ奉ル事無限シ」。八日ト云朝ニ出給ヘリ、傍ニ玉ノ机ノ
上一卷ノ經有リ。太子、惠慈語テ宣ク、「我ガ前身ニ衡山有リシ時ニ、持
奉リシ經、是也。去シ年、妹子ガ持来レリシ經ハ、我ガ弟子ノ經也。三人
ノ老僧ノ我ガ納シ所ヲ不知シテ、異經ヲ遺タリシカバ、我ガ魂遺テ取タル
也」ト。

(資料 9) は卷十一の冒頭話「聖徳太子於此朝始弘佛法語」である。この話は複数の資料を参照して出来上がった話であるが、その主たる典拠は『三宝絵詞』である。日本仏法伝来史を語る巻十一の冒頭にこの話を配置させた『今昔』の意図は話末評語「此ノ朝ニ仏法ノ伝ハル事ハ、太子ノ御世ヨリ弘メ給ヘル也」からも明らかに見られよう。ところが日本の仏法伝来史を語るこの話はしかし初伝のことには触れていない。それは「聖徳太子の話をもつて日本仏教の始発的における自力開発的な側面を大きくクローズアップ」⁵⁾させる意図をもっているからである。それは聖徳太子は釈尊伝に似た託胎の夢、出生時の奇瑞幼少時の聡明等々による「生来の聖者」⁶⁾でこの話が持つ強い自国意識はそれをもつて意義づけられているのである。しかし強固な自国意識に基づいているこの話もその構想から見れば今まで考察してきたように三国意識との有機的関係を土台に構成されている点では変わりはない。それを資料から見る

と次のようである。つまり（資料 a）で聖徳太子は前生に震旦の衡山の思禪法師（慧思大師）だったと言うところに注目したい。聖徳太子の前生譚はいろいろな伝承経路を伝わって変化していくが、『今昔』は観音化身説と慧思大師前生譚を収録している。その中でも「聖徳太子に対する景仰は、鎌倉時代の前後において、きはめて盛んであった。……その太子景仰は、太子を観音菩薩の化身とする信仰に焦点をおいてをり、このころの太子信仰は、ほとんど観音信仰と相表裏するといつてよいほどであった。」⁷⁾という久保田収氏の指摘から見られるように、聖徳太子の前生譚としては観音化身説がもっとも重んじられる。しかし本稿での問題提起はむしろ慧思大師前生譚にある。『今昔』の慧思大師前生譚に対して荒木浩氏は「伝略などを整理展開して、慧思を含め、すべてを観音化身説が包摂してゆくという説話構造を簡略明確に示したのが、今昔が依拠した三宝絵中1の叙述であった。……まさに慧思後身説はあるいは慧思という存在自体が今昔太子伝では太子の前生の一態としての位置付けにとどまっていたのである」⁸⁾とあってその意義はさほど評価されていないようである。しかし『今昔』における慧思大師前生譚は冒頭話の構想からその意義を見直すべきだと思う。それは『今昔』が自己の作品に構築した三国構想という世界観に関わる問題である。つまり（資料 b）から見ると『今昔』はこの慧思大師前生説をもって「仏・法・僧」の三宝中の法である經典の仏法流伝の三国ルートをつまえているのである。確かに慧思大師前生譚は前生譚それ自体の意義としては荒木浩氏の指摘どおりに観音化身説に包摂されてしまう。しかし説話のだいの記事を慧思大師前生譚に割愛している『今昔』の態度から見ればその意義は単純な前生譚としての機能で終わるわけではなく三国仏法伝来のルートつまり三国構想の機制として理解すべきと思う。さてこの冒頭話において『今昔』が意図した三国仏法流伝から三韓のことはたしかに外れている。しかし『今昔』の意図を側面から裏付けてくれる物語において欠けられない存在が三韓である。それはこの話の意義を根底から支えている太子の「生来の聖者」としての偉大さを裏付けてくれるのは（資料 b）から見られる高句麗の僧侶惠慈をはじめ

三韓関係の記述だからである。歴史上の三韓関係の記事がこの話の全般に互って一々細かく記述されていることからそれが分かる。恵慈等が聖徳太子の偉大さを裏付ける構想は同巻の第七話で天竺の波羅門僧正が行基の偉大さを裏付けるのと同じ発想と思われる。このような構成上の三韓関係説話の機能は長谷観音のご利益が新羅の後にまで及んだという「巻十六新羅后蒙国王咎得長谷観音助語第十九」にも通じていると思う。その本文を引用して見ると「実ニ長谷ノ観音ノ靈験不思議也。念ジ奉ル人、他国マデ其ノ利益ヲ不蒙ズト云フ事無し。人専ニ歩ヲ運ビ、首ヲ低テ礼拝シ可奉シトナム語り伝ヘタルトヤ。」と記述して長谷観音の靈力の裏付けとして「他国マデ」（新羅国）知られたことを語っているのである。

V おわりに

以上の考察から見れば三韓関係説話に対する『今昔』の態度は、捨象ではなく、受容の態度だと思う。確かに『今昔』の三国構想から三韓は欠落している。しかし『今昔』の三国構想は本稿の考察によれば歴史的に受け継いだむしろ当時の一般的な世界観に基づいていることが知られよう。このような三国世界観に対して田村円澄氏の「四国仏法」^⑨という世界観の提示があるが、しかし『今昔』三国構想における三韓関係説話から見れば三韓に対する『今昔』の意識は、従来の研究結果のように鼓吹された自国意識によって排除された存在ではなく、むしろ自国意識を支えてくれる存在として形象化されていると思う。その欠落が意味するのは決して無化でも捨象でもない。それは固定化された三国意識との軋轢の渦中に必要不可欠な一つの断層として位置していると思う。そしてその位相は三国意識の延長線上に位置づけられると思う。

* 本稿における『今昔物語集』の本文引用は、日本古典文学大系本『今昔物語集』に依った。

注

① この図表は森 正人『今昔物語集の生成』（和泉書院 1976年）による。

- ② 『日本書紀』（古典文学大系本『日本書紀』下）
- ③ 池上洵一（新岩波古典文学大系『今昔物語集』）解説で「もともと三国とは単なる地理的空間ではなく、仏教の伝わった空間、仏教が伝来した道筋として特別の意味を持つ空間」とある。
- ④ 前田雅之「今昔物語集本朝仏法伝来史の歴史叙述」（『日本文学』巻34 1985）
- ⑤ 池上洵一氏の前掲書
- ⑥ 同書
- ⑦ 久保田収「聖徳太子観音化身説の源由」（『密教文化』32）
- ⑧ 荒木浩「仏法初伝と太子伝－今昔物語集本朝部の構想をめぐって－」
- ⑨ 田村円澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』（吉川弘文館 1980）（『説話文学研究』第二十九号 1994）

討議要旨

座長よりお伽草子の『猫の草紙』を引いて、日本を小国とする意識についての助言がなされた。筑波大学の名波弘彰氏からも、日本を世界の中で自覚する「自国意識」の段階と、日本を他の国より優越すると考える「ナショナリズム」の段階は、二つにわけて考えた方がよいのではないかとの助言があった。